



[令和 3 年 10 月 13 日 定例会発表要旨]

地図と鉱石の「山の手博物館」ものがたり

手稲郷土史研究会 会員（山の手博物館 理事） 若松 幹 男

◆はじめに

JR 手稲駅の南西 6km 余、北一条・宮の沢通と交わる琴似発寒川の右岸に、「地図と鉱石の『山の手博物館』」という小さな博物館がある。そこには、世界の珍しい鉱石や北海道の鉱石が整然と並べられており、居ながらにして鉱物に関する学習ができ、美しい鉱石を鑑賞することができる。このため、いつも子どもたちでにぎわっている場所でもある。



北海道は、江戸時代後期から明治時代にかけて 砂金や白金ブームに沸いたところである。金、銀、銅、鉛、亜鉛やその他の貴金属が産出され、多くの金属鉱山が稼働していたが、残念ながら、海外の安価な鉱石の輸入におされ、その全ての鉱山が閉山に追い込まれてしまった。そのようなことから、『山の手博物館』は、北海道で産出される鉱石を系統的に収集整理、展示して後世に残すとともに、次代を担う子どもたちに鉱物の面白さ、美しさを知ってもらおうという夢のもと、平成 16 年 4 月に 初代館長 故 鈴木哲夫氏が私財をなげうって設立したものである（平成 22 年に一般財団法人として登録）。



「山の手博物館」正面玄関

◆展示内容の紹介

① 世界の鉱石等の展示 … 世界や日本で産出されるさまざまな鉱石はもちろん、アフリカのナビビアで発見された“隕石”や 黄鉄鉱化した 直径 40cm のヨーロッパ産“アンモナイト”、沖縄近海の 1,000m をこえる深海にある伊是名海穴^{いぜなかいけつ}で採取された“チムニー”（海底熱水鉱床）など、鉱石以外の貴重かつ珍しい石や化石も常設展示されている。中には、高さ 40cm、直径 20cm の半透明なピンク色の中国産“螢石”などもあり、訪れる方の眼を楽しませている。



チムニー



螢石

② 北海道の鉱石展示 … 北海道は 金属鉱山の宝庫であったが、その全てが閉山したため、後世にそれらの資料を残しておく場が必要である。そのため『山の手博物館』では、北海道で産出された鉱石や既にその姿を消してしまった鉱山に関する諸資料のほとんどを収蔵しており、代表的な鉱石を常設展示している。貴重な鉱石には「手稲鉱山」で昭和 11 年に発見された“手稲石”や 檜山郡上ノ国町の「上ノ国鉱山」産出の“上国石”などがある。“手稲石”はテルル酸化物と銅が結合してできた鮮やかな青色をした鉱物で、水で溶けやすいため、滅多に見ることのできないものである。



「手稲鉱山」で発見された貴重な手稲石



イベント～石の見方の講習会



イベント～鉱物採取の巡検

◆イベント紹介

小中学生や一般の方を対象にした講習会、巡検、特別展などのイベントが定期的、スポット的に催されている。これらには専門家の参加も多く、わかりやすい助言が得られるのも、この博物館ならではのことだろう。

講習会は、博物館の建物の地下室を利用して、鉱石や岩石の観察、顕微鏡の利用、地図、地質図の見方などを行っている。巡検は、日帰り、または1泊2日で北海道一円を対象にして、岩石、鉱石、化石などの採取に取り組んでおり、時には、砂金採取なども楽しんでいる。



「手稲鉱山」周辺で採取した鉱物を区役所で展示

◆手稲郷土史研究会の「手稲鉱山」の催事に協力

「手稲鉱山」は、手稲を支える基幹産業であった。このことを多くの区民に知ってもらおうと、平成27年9月、手稲区役所の1階ロビーで『手稲鉱山ものがたり』というテーマのもと、手稲郷土史研究会主催の特別展が開かれ、そこには『山の手博物館』の案内によって同研究会の会員30名が採取した鉱石の実物も展示された。

また、令和2年6月から区役所内の郷土資料展示コーナーで掲示されたパネル展『手稲最大の産業遺産～金が採れたヤマ手稲鉱山』でも、博物館が所蔵する「手稲鉱山」の特徴的な鉱物の写真を提供した。

◆「山の手博物館」の案内

小さいながらも大きな夢が詰まっている『山の手博物館』へ、ぜひご友人やご家族を誘って、訪ねていただきたいと思う。所在地：札幌市西区山の手7条8丁目6-1、電話：011-623-3321、開館時間：10時～17時、休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）・年末年始、入場料：大人210円、子ども（小中高生）100円。



手稲郷土史研究会作成のパネル

③いろいろな鉱物・鉱石の観察コーナー … このコーナーを利用するだけで、世界で産出されるほとんどの鉱石や鉱物を学ぶことができる。また、偏光顕微鏡や反射顕微鏡など各種顕微鏡も設置し、来館者が気軽に観察が行えるよう便宜を図っている。

④地図・衛星画像・航空写真 … 地質図や古地図などを中心に、世界や日本の珍しい地図が展示されており、現在の地形図や住宅地図、衛星画像なども紙ベースやコンピュータ上で見られるように工夫されている。このコーナーには、伊能忠敬の北海道古地図（複製版）や大正時代の後志管内道路敷地調査平面図50本など、貴重で面白いものがたくさんある。さらに、展示だけではなく、これらの地図の活用に関する相談や購入時の斡旋・販売も行っている。また、地図の作製には測量機器が欠かせないため、新旧の測量機器を展示し、詳しく紹介している。

次回定例会 ⇒ 発表内容「創立50周年 稲穂のJR北海道札幌運転所」敷村朝生氏（JR北海道札幌運転所総務企画科 科長）
12月8日（水）13：30～/手稲区民センター2階 第一会議室/当分のあいだ参加は会員限定とさせていただきます

●研究ノート 「軽川」地名伝承に挑戦する — 永田方正説を補正する旅(3)

手稲郷土史研究会 会員 沖田 紘 昭

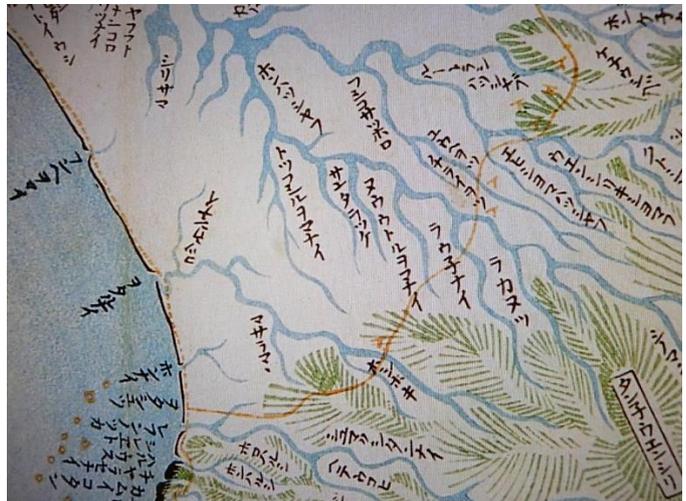
4. 柳田國男の「カルウとカルコ」説の検討

ここで、少しよそ道に逸れることをお許し願いたい。私は古本屋めぐりが趣味で、かつて狸小路の八光書店で買った本の中に 文芸春秋社が昭和 42 年に出版した『人生の本』というシリーズがあり、その5番目のタイトルが『歴史と風土』であった。解説が中村光夫で、柳田國男の他に 岡本太郎、池田弥三郎、折口信男、寺田寅彦などの文章が掲載されている。いずれも私の蒙を啓く文章ばかりで、寝付けぬ夜の愛読書の一冊になっている。柳田からは3篇あり、その一つが「棒の歴史」である。日本文化に特有といわれる「風呂敷包み」の話に始まり、人間が物を運ぶために凝らされてきた各種工夫が語られ、「駄荷と歩荷」の項に以下の文章がある。

「人が自ら働く昔からの運搬法の中では、ただこの背を使うものだけが遠方の輸送に供せられしたがってまた職業になっていた。わが邦の中央山脈では、これを横断する無数の交通路があり、いずれもこれによって物を向こう側へ送っていたと思われるが、そういう中でも北陸の各県から、主として海で採った物を持ち込んで、麻や米麦などの内陸の産物と、交易したものが最も有名で、私たちはこれをポッカと呼んでいた。〈中略〉多くの昔からある峠路の麓には、軽井沢 ※注5 という地名がまだ残っている。富士や日光山の馬返しというのも意味は同じでここまで馬の背に積んで来た荷物を、この沢の口で卸して小さくして、人がかかるうことになっていたところなのである。縄で背中に物を持ちつづけることをカルウという言葉は多くの人々がまだ知っている。奥羽地方に行くと、家々の若い働き手をカリコというが、これもかるい子で、かるうのが彼らの主な仕事だったからである。江戸の町にももとはカルコという者が多く住んで、引越しその他の運搬にやとわれていたらしく、今も軽子坂という地名が残っている。ちょうど牛込見附と飯田橋との間を、北へ登って行く細い坂路がそれで、馬はいくらも使える江戸のような土地でも、やはり人の背を借りた方が、便利な場合がいくらもあったのである。」—— これだ！と、私は思わず快哉を叫ぶほどに興奮した。奥羽人のカリコが集まる沢、さらにカルコ川からガルガワになったのではないか。そう思うと、初めてガルガワの納得のいく説明を受けた気がした。その後の手稲における歴史を見ても、ヤン衆の送り迎えの仕事から軽川駅前で旅館業へ乗り出していく船木与八や 名湯 藤迺舎鉦泉（現 藤の湯）を開いた村上藤吉が 軽川街道で「カルコ」に顔の利く親分であり、消防団を組織したり、村総代になったりしていくのも頷けるのである。つまり、このカルコが軽川の最初の住人なのである。軽川の扇状地は、自然のままなら大小の石がゴロゴロする畑にも水田にも適しない場所である。しかし、交通上では要になる場所であった。

5. アイヌ語名「トシリパオマナイ」のなぞ

松浦武四郎の『東西蝦夷山川地理取調圖』にもはっきりと記された手稲山麓の川の名は、この地にあったアイヌの人々の営みを伝える。チライラツ（イトウの多くいる川）、サンタラツ（荷縄の下がった処、または荷縄にて鹿を縛っておろす処）、ラカヌツ（うぐいの産卵処）など狩猟の民ならではの名前が付けられている。しかし、軽川の場合はそれとは異なる。現在、川に架かる主な橋のたもとに設置されている説明板には、アイヌ語に由来する古称として「トシリ（墓）・パ（頭）・オマ（そこから）・ナイ（川）」が書かれている。



松浦武四郎『東西蝦夷山川地理取調圖』より一部抜粋
(函館市中央図書館デジタル資料館 公開図)

コタンカラカムイ（国造りの神）の墳頭から流れ出る川として、特別に大切に思われてきた川である。手稲山はもともと植生が豊かで、動物たちもオオカミ、クマを頂点とし、シカ、キツネ、ウサギ、タヌキ、リスなど多様性に富んでいた。狩猟民族であるアイヌにとってこれほど恵まれたところは滅多にないであろうから、かつてここに大きなコタンがあったろうことは推測できる。つまり、コタンカラカムイが（地上に降りたとき）に住む場所としてもふさわしいところであったはずである。

我が国の『古事記』のようにアイヌにも天地創造の神話※注6があり、天上のコタンカラカムイが地上にアイヌモシリを造るためにカムイを遣わした※注7とされている。しかし、ここで疑問が生ずる。なぜ天上の神の墓が地上にあるのか。もっとも可能性のある推理をいえば、文化神 オキクルミ※注8の生まれ変わりと思われた優れた酋長の墓ではないかということだが、もちろん断言はできない。今後も、手稲山を中心としたアイヌの世界を俯瞰できなければ納得のいく答えは出ないであろう。軽川は、アイヌ名もまた謎に包まれているのである。

6. おわりに

終了するにはまだまだ不十分な内容で、納得できるものではない。これまでは、北海道史をはじめとしてどの史料を見ても、軽川については永田方正説しか載っていない。このような状況の中で、大先輩の説に異を唱えることになってしまったが、その中の「奥羽人」についての補説にはなったかもしれない。またこの研究中、アイヌ語地名については山田秀三氏※注9に大変お世話になったが、併せて、松浦武四郎の『新道日誌』に軽川に別のアイヌ名があることを教えていただいた。今後の課題である。いつの日か、手稲山を中心としたアイヌの世界について改めて書いてみたいという希望が生まれたことを報告し、このノートを締めることにする。 [了]

※注5 明治42年、柳田國男を中心として創立された郷土会の機関誌「郷土研究」第二巻 第12号 P.723 参照。

※注6 『アイヌの世界観』講談社学術文庫、山田孝子著（P.27）によれば、「アイヌにも天地創造の神話があり、口承文芸であるカムイ・ユーカラ（神謡）、オイナ（人間の始祖、文化神オイナカムイの体験談）、カムイ・ウエケペレ（昔話）の形の中によく出てくる」という。

※注7 コタンカラカムイは天上（リクン・カント）の一番高い所にあるカムイモシリにいて、地上にアイヌモシリを造るために神を遣わした。一説によれば、その神は羊蹄山の山頂に降り、最初に雲をうめて陸地を造り、次に木から人間を造ったといわれる。また、更科源蔵著の歴史と民族『アイヌ』社会思想社刊、昭和43年発行（P.22）によれば、コタンカラカムイは楡の女神を地上に遣わし、大雪山系のオプタテシケヌプリに降り、人間の始祖アイヌラックルを生んだと書かれている。

※注8 『地図でみるアイヌの歴史』明石書店刊、平山祐人著（P.77）によれば、「文化神オイナカムイは地域によってアイヌラックルともオキクルミともよばれ、天上と地上を行き来し、男の作るもの、女の作るものを与え、人間に暮らし方を教えた」とされ、アイヌの人々に最も親しまれた神であるとされている。

※注9 『東北・アイヌ語地名の研究』平成5年、草風館刊（P.53）には、「武四郎は『新道日誌』で軽川をトシリコマナイ、本名ホンシュルクオマナイ（トリカブトある沢）と思われる」と書いた。」とある。



定例会風景（10/13）

★ **定例会を再開** “コロナ禍”により中止を余儀なくされていた手稲郷土史研究会の定例会を10月13日、三ヶ月ぶりに開催。集い 学び合うことの大切さを確認したひとときとなりました。

★ **所蔵図書の出し出しについて** 当研究会が所蔵する図書は、現在、元顧問の茂内義雄氏宅に保管をお願いしています。感染症予防対策が続く令和3年度中は、定例会において「蔵書目録」をご覧になり、お手数でも資料部を通してご利用ください。